

監修 齋藤惇夫

作家・児童文学者。福音館書店の専務取締役(編集責任者)として子どもの本の編集に携わり、2000年に退社、創作活動に専念。著書に『グリックの冒険』(岩波書店・日本児童文学者協会新人賞受賞)、『冒険者たち』(岩波書店・国際アンデルセン賞優良作品賞受賞)、『ガンバとカワウソの冒険』(岩波書店・野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞)、『哲夫の春休み』(岩波書店)などがある。

# 「やねの上のカールソン」

「で、きみは、いくつなの？」背中にプロペラをつけ、空を飛びながら突然現れた小さなおじさん、カールソンに、主人公のリッレブルルは聞きます。「ぼくはいくつか？ぼくは、ちょうどいい年だよ」「ぼくは、うつくしくて、じつにかしこくて、ぐあいよくふとってて、ちょうどいい年なんだ」とカールソンは答えます。蒸気エンジンが爆発したり、水が溢れたり、掃除機のごみをぶちまけたり…カールソンは次々と日常生活の秩序を乱し、それを当然のように楽しみます。そしてリッレブルルを背中に乗せて、ストックホルムのマンションの屋根の上を飛び回ります。退屈で孤独だったリッレブルルの日常は、冒険の毎日へと変わっていきます。

『やねの上のカールソン』が書かれたのは「長くつ下のピッピ」から約10年の月日が流れた1955年、リンドグレーンの仕事徐徐に軌道に乗って来た頃でした。この作品はピッピシリーズに次ぐ「荒唐無稽な冒険物語」ですが、主人公のカーソンはピッピと違って小ずく、自己中心で、自信家のくせに失敗だらけの、けれど何故か憎めない、小さな太ったおじさんです。あまりの自由奔放ぶりに、教育学者や常識人たちはピッピの時と同様に顔をしかめました。子どもたちはこのハチャメチャな物語を心から歓迎しました。特に旧東欧圏で人気が高く、ロシアではピッピよりも、エミールよりも先に翻訳され「児童文学としては初めての“アンチヒーロー”となった」と評されました。ずる賢く、皮肉屋なカールソンが、抑圧された環境を壊していく…当時の社会主義

義諸国で暮らす人々にとって、これほど痛快な物語はなかったのかもしれない。

カールソンが飛び回る屋根。その舞台はストックホルムの中心にあるヴァーサ公園沿い、ウルカヌス通りのマンションでした。リンドグレーンが結婚後、最初に住んだ部屋であり、彼女はそこで夢中になって子育てをしました。その後、公園の北東に面したマンションに引っ越してから、本格的に執筆活動を始め、亡くなるまでの60年間を過ごすことになるのですが、「カールソンを書いていた時、私はお話の舞台として、いつもあのマンションのことを思い浮かべていました」と後年語っています。ウルカヌス通りのマンションはリンドグレーンの、子どもたちへの思いが詰まった場所でした。

## PRESENT

リンドグレーンの本をプレゼントします。詳しくはP.26をご覧ください。

※アストリッド・リンドグレーン作  
 大塚勇三訳  
 『やねの上のカールソン』(岩波書店刊)

「きみ、いくつかね？」カールソンが聞きました。「七つ」。リッレブルルは答えます。「よろしい。いつまでも七つでいたまえ。」—いつまでも子どもの心を失わなかったリンドグレーン。彼女はカールソンと一緒に、背中にプロペラをつけて、窮屈なルールや秩序、孤独をぶち壊し、世界中の子どもたちを、胸躍る冒険の世界へと導いてくれたのです。



ASTRID LINDGREN  
 アストリッド・リンドグレーン  
 1907-2002

スウェーデンのスマーランド地方、ヴィンメルビーに生まれ、小さな農場で4人兄弟の長女として子ども時代を過ごす。『長くつ下のピッピ』『やかまし村の子どもたち』『名探偵カッレくん』など、世界中で愛されている物語は130作品以上。2002年には、児童青少年文学賞である「アストリッド・リンドグレーン記念文学賞」が創設された。